剣と、魔法と、そして明日と

涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
剣と、魔法と、そして明日と

【Ｎコード】
Ｎ８８１９Ｘ

【作者名】
涼

【あらすじ】
異世界ファンタジーもの。
三人の主人公が色々な問題に関わります。あるときはぶち壊し、あるときは命を奪い、あるときは再生を促します。
幼馴染である三人は様々な経験を積んでいき、不本意にもこの世界の真理へと近づいていきます。
三人ともカテゴリは違いますが最強の部類です。ちなみに転生ものではありません。
適度なシリアスと適度なコメディー入れてく予定ですが、戦闘シー

ンが血生臭かったり、ちょっぴりエッチなシーンがあったりするので生理的に受け付けない方は注意して下さい。

プロローグ

俺は感じたい。俺が俺である意味を。

僕は触れたい。この世界の闇を。

私は知りたい。繋がりの楔が在る場所を。

俺達には明確な目的は無い。だって靄(もや)で霞んで視えないから。

僕達は選択して行くのだろう。結果としてそれは復讐なのかもしれない。

私達は踏み出すべき場所にいる。誰かに指図されるのでは無く自分が決めるんだ。

何かに縋(すが)りつくのはもう止めよう。

――ここは異世界サークレイン。

海で隔たれた五つの地域を擁する、剣と魔法の世界。

この世界では人族、獣人族、竜人族、エルフ族など様々な種族が存在しており、各種族は自分達のテリトリーを守り、そして協力し合いながらその日その日を生きている。

そんな市井の生活環境は場所によって格差はあるものの、安定しているといえるだろう。

その最たるものは魔耀石(まようせき)と呼ばれる魔を有する鉱石の利用である。

魔耀石は魔耀制御器（コントローラー）を介して魔力をエネルギーとして活用する事が可能である。
それは生活面のみならず戦いにまで利用が可能となっている。
いや、寧（むし）ろ戦いでの利用から市井の生活をサポート出来るまでに至ったといえるだろう。

魔耀石が発掘される耀鉱山（ようこうざん）は世界に確認されているだけで十二か所。
この鉱山を自分の国の領土にしようと各地域で小競り合いレベルの小規模な争いから、戦争と呼べる大規模な争いまでもが今日（こんにち）も繰り広げられている。
その結果、各々は魔耀石を軍事利用する為の研究に力を入れ、現在の生活を得るまで発展を遂げた。

皮肉にも戦争が技術発展を促す。それはどこの世界でも変わらない。
痛みを覚えなければ先に進めない。そんな自分達は本当に未熟で救えない生き物なのかもしれない。

ウエス地域の三大王国のひとつ。南側に位置するディタイム王国。
その王都より３０？ほど離れた耀鉱山ノーヴェに近い耀鉱都市バルゴでこの物語は始まる。

三人の男の子。彼らは偶然にも別々の場所で空を仰いでいた。

第1話

おれが目をさますと、このへやに入るまえはまっ白だったかべとかゆかは、自分の口とか、からだから出たものでよごれていた。
きおくにはないけど、あばれたあともある。
まぁこれはいつものこと。でも今日は良いほうだと思う。えらいなおれはー。

ショウは勢いよく飛び起きた。
自由な時間になった嬉しさからか足取りは軽く、ステップ混じりに部屋の扉へと向かった。
金色に輝くツンツンのショートヘアーが小気味好く揺れる。
眉が薄く、目は少し吊り目気味で8歳ながら若干の威圧感はあるが、左の八重歯と大きな茶色の瞳が雰囲気を柔らかくさせている。
天真爛漫な悪戯っ子。彼はそのイメージそのままだ。

扉に手を掛けるショウ。いつもの事ながらロックされていて開かない。

正直言うと、こんな扉は力尽くでも開けれられる。
ダメージを抑える為の魔法陣も展開されているが、そんなもんは自分には関係無い。
しかし研究所を破壊してはアウストに叱られるのは目に見えている。

アウストにおこられるとかこわすぎるもんね。

仕方なく部屋の天井近くある横幅に広い鏡を見上げた。
こちらからは向こう側は見えない。

鏡の後ろにいると思われる研究者に向かって無言のお願いをしてみた。

見張りを続けていた研究者から、やっと起きたかぁ～と溜息交じりの不満が漏れた。

勿論、所長や主任が居る所でそんな事は言えないが、この場に居ない人間に気を使う必要は無い。

寝ている時に何かしらの反応や異変が起こるかもしれないから見張っとけとの指示。

正直、寝ていて（気絶していて）全く変化の無い子供を見続ける時間は苦痛で仕方が無い。

そんな事は露知らない当事者は外に出たがっているようだ。

しかし悪いが簡単にはこの防護研究室からは出せない。

自制の利かない破壊兵器が研究所内部を自由に彷徨(うろつ)いていたら安心して研究なんて出来やしない。

己に制御の出来ない力は己に害を及ぼす。

指示を仰ぐ為、この無邪気な破壊兵器を手懐けている彼に電話を掛けた。

そう、もう一人の破壊兵器に。

「壱号ですか？陸(ろく)号が起きました。……ええ、はい。……いや、しかし。……はい。わかりました。」

眉を顰(ひそ)めながら電話を切る。

何かあったら責任は私が取るだと？そんな権利は兵器になんてあるものか。

前大戦で戦果を挙げたからといって何を偉そうに。

だからと言って職務を放棄する事は赦されない。
拡声器のスイッチを入る。
「ロックを解除します。壱号が私室で待っているので向かいなさい。寄り道は認めません。」

研究者の声を聞いたショウは露骨に顔を顰(しか)めた。

いち号じゃなくてアウストだよ。それにおれはろく号じゃなくてショウだから！

しかし相手にされないと判っている、というか経験から学んだので口には出さないが腹は立つ。
ガチャッ。と遠隔で解除された扉を壊さない程度に乱暴に開け閉めしてやった。

ちなみにマイクを使った拡声器や遠隔ロック解除などは共振耀石を応用したものである。
この技術は最近確立されたもので、実装されているのはバルゴ研究所のみ。
バルゴ研究所の最高責任者であるシアン所長が開発したとされている。

第2話

【バルゴ魔耀研究所　アウスト私室】

「身体は大丈夫ですか？」
車椅子に乗った３０代中盤位に見える白髪の男性は優しい笑顔でショウに問いかけた。

「おれはだいじょうぶだよ。アウストはどう？からだいたくない？」
「ありがとう。私も大丈夫ですよ。約束通りこの後に稽古をつけてあげれそうです。」
「やったぁー！……あ、でもむりはしないでね。」

アウストと呼ばれた男性は見たところ病弱な優男といった感じだが、ひとつだけ目の惹く特徴がある。
それは眉間の少し上。

純白に輝く菱形の魔耀石がその部分に埋め込まれている。
そう、言葉の通りに埋め込まれているのだ。

人族が、というかこの世界で生きる者が魔耀石をその身に宿している事は自然界ではありえない。
即ち(すなわ)それは人工的に造られらたモノか、改造されたモノかのどちらかになる。

アウストは車椅子をショウが座る椅子の前へ進めると、頭をくしゃっと撫でた。
「優しいですね。でもいつも言ってますが、優しいだけでは生きて

はいけませんよ。時には厳しさも必要となってきます。自分が生きる為には手段を選んではいられない事もあるのです。」
「なんどもいわれればわかるよ。それにおれはアウストとおばちゃんくらいにしかやさしくしてないし。」
ショウは拗ねた様に口を膨らませた。

そんな様子を苦笑いしながらも目は真剣なアウストは若干声を潜めながら続ける。
「それなら良いですが、余りこの研究所の人々に深入りは禁物です。彼らは私達を物としか見てませんから。」
頭に置いてあった手をショウの両腕へとまわす。
「そしていつかこの研究所の外の世界へ足を踏み出した時にも他人を簡単には信じてはいけません。私との『家族』という絆だけを信じなさい。」
少し強い力で腕を掴まれたが、それもショウにとっては嬉しかった。
「うん！アウストとの『家族』のきずなをしんじるよ！」

今までこの研究所の人々にされた事を思い出して胸の奥が重くなるのを感じながら、ショウはその小さい拳を握り締めた。

その拳。

左右の甲から黄金に光り輝く魔力が溢れ出す。

宿主の怒りや悲しみという感情は糧となりて魔耀石は呼応し胎動。

この稀有（けう）な魔耀石は喰っている。

少年の穢れ無き幼い精神を。

———アウストはこの『家族』の可能性に未来を視る。

「落ち着きなさい。」

アウストは静かに、そして力強く言葉を放つ。

あっ！とショウは我に返った。

魔力の輝きは治まる。

「ご、ごめんなさい。」

「良いのですよ。その力を制御する為に成長していきましょう。」

「は、はい！」

「ふふっ。」

微笑むとアウストは再度頭を撫でる。

恥ずかしいやら嬉しいやらの複雑な感情をしながら俯(うつむ)く。

そこで廊下から聞き慣れてしまった嫌な足音にショウは気が付いた。

第3話

【バルゴ魔耀研究所　アウスト私室】

「貴様ら何をしているっ！魔力を抑えないか！実験用の魔計器に影響が出るぞ！」

ノックもせず乱暴に部屋へと入ってきたシアン・ランエーズ所長は怒鳴り声を上げた。

壮年のこの男はバルゴ魔耀研究所の最高責任者であり、魔術士としてもそれなりに実力を持つ。

ちなみに外部者の前では知的で冷静な風を装っているが、本質は気性の激しい男である。

そんなシアンの顔を見てショウは吹き出しそうになるを我慢するのにいつも必死だった。

だって、かお赤すぎるでしょこのおっさん。ぷぷっ。

ショウの顔を見て何を考えているか察したシアンは余計に顔を赤くしたが、無視をしてアウストに近寄った。

アウストは微笑んだままだ。

小さく舌打ちをしてから、グッとそんな優男を睨んだ。

「壱号、貴様に陸号（ろく）の教育を任せたのは私だが、それは判断を誤ったようだな。失敗作が成功作にものを教えるなど所詮は無理な話だったか。」

は！？なんだとこの赤ダコ！

「アウストのわる口をいうな！」
「生意気だぞ小僧！お前がこの世に居られるのは誰のお陰だと思っている！」
ショウの反論に間髪入れず怒鳴るシアン。

アウストは車椅子に乗りながら深く頭を下げた。
「申し訳ありません所長。全て私に責任があるのは確かです。後でショウにはよく聞かせておきますので御怒りを治めて頂けませんか。」
同時にショウの頭を自らの手で強引に下げさせる。

ふんっ！と鼻息を吹きながらも遜(へりくだ)った言い回しに満足したようだ。
「まぁいいだろう。私は貴様らと仲良くお喋りをする為に態々(わざわざ)足を運んだ訳ではない。」

ぜんぜんなかよくなんかないわ！ばーか！

「壱号、貴様は明日から耀鉱山ノーヴェで魔物の調査活動に参加したのち、そのまま王都に向かい直接報告を行え。これは本国からの命令であり、決定事項だ。」
詳しくは後で使いを寄こすと言い、ショウに一瞥もくれずに部屋を出て行った。

無能で単純な男。これがアウストのシアンに対する評価である。

「う～ん、ただ嫌味を言いに来ただけでは無いとは思いましたが、どうも面倒事に巻き込まれたようですね。」
ショウに向き直りながら溜息をついた。
「アウスト～。いっちゃうの～？」

「本国からの命令ですから仕方がありませんね。ふふっ、そんな情けない顔をしないで下さい。」
「でも、いきなりなんなんだろうね。きゅうにおしごとがきまるなんてあんまりないよね。」
「そうですね。でも内容はなんとなく判りますよ。私に白羽の矢が立ったのは妥当でしょう。」

流石はアウストだと思った。
新鮮で正確な情報を得るのは事を有利に運ぶ為には絶対的に必須だ。それは彼がこの少年に口煩く言い聞かせた事のひとつでもある。
彼は独自の情報網が有るらしく、常に最新情報を持っている。
ただしショウはその入手経路を知らない。というかアウストは教えてくれなかった。

「でもあまり研究所内で喋って良い内容で無いんですよ。部屋の外には監視役の騎士が居ますしね。……なので外でご飯でも食べながらというのはどうでしょう？」
声を顰(ひそ)めながらアウストは今日一番の笑みで提案した。

最初は何を言われたか解らなかった。

その内容を理解した時にはアウストに身体を抱えられていた。

二人を乗せた車椅子を中心に淡い光の魔法陣が展開する。

瞬間、世界が歪んだ。

――――ぽいっ。

地面に抛(ほう)られた。

痛みは無い。

天然の寝床が優しく自分を包み込む。

生まれて初めて触れた。

聴いた。

感じた。

青く茂る草原で彼は天を仰ぐ。

そこにはどこまでもつづく空がひろがっていた。

第４話

耀鉱山ノーヴェでは採鉱と選鉱が行われる。
簡単に言うと採鉱は耀石を採掘する事で、選鉱は良い耀石と悪い耀石を選別する事である。
現場で採掘し選別された耀石（と微量な通常の鉱石）は耀鉱山ノーヴェの直ぐ傍に在るカーナ村まで運搬される。運び込まれた耀石や鉱石は村にある工場で製錬され、魔耀石や金属を抽出する。
その後さらに選別され、最終的には魔耀都市バルゴへと運ばれる事となる。
火耀石や雷耀石などの一般的な魔耀石は商人達の手により一般家庭へと渡り、採掘数の極端に少ない特殊な魔耀石はバルゴ研究所預かりとなる。

ショウが草原へ転移する１３日前。

カーナ村では今日もいつもと変わらぬ風景で満たされていた。
朝早くに採掘チームとその護衛らが村での最終準備を終えて耀鉱山へと出発する。
村には最低限の店と宿しか無く、他には民家がポツポツと並ぶような街並みだ。
村の耀鉱山側には大きな製錬工場が佇み、村の住人と製錬士達がせっせと働く。

そんな彼らは知らなかった。

いや、知る由（よし）もなかった。

其処（そこ）は現在、壊滅の危機に晒（さら）されているという事に。

【カーナ村　外れの森　ノリムネの家】

「はぁ……。こりゃ参ったのう。」

ノリムネは使者が持ってきた親書の書面にもう一度目を通しながら溜息を吐いた。

背凭(せもた)れに体を深く預け、腕を組む。

６０歳を過ぎて顔の皺(しわ)は深くなったものの、肉体は現役の頃と然(さ)程(ほど)変わらない。

ディタイム王国王直属騎士隊の元隊長であった彼だが現在は退役し、カーナ村の外れにある森の中で悠々自適に余生を送っている。

長年連れ添った妻のクラサは2年前に他界した。

なあクラサ。儂(わし)は如何(どう)したら良いのかねぇ？

思いを巡らしていると、そこへ黒髪の子供が小走りに近寄ってくる。

「じいちゃん、筋トレおわったよ。」

「じゃあもうワンセットじゃな。」

「え、やだ。お腹すいたから今日はもうやめようよ～。」

フォッ！

ノリムネの木刀が風を斬る。

「避けるな馬鹿者。」

バックステップで避けた少年に向かって冷やかな目を向ける。

「そりゃ避けるよ！いまの頭に当たってたら死んでるよ！？」

「全くお前という奴は……やはり精神修行じゃな。其処に座って瞑想せい。……でないと今度は本気で撃ち込むぞ。」

背筋が凍る。

また拒否しようとしていた少年は育ての親が放つプレッシャーから其れ(そ)が本気である事を察した。

ペタンとその場に座り、目を閉じる。

こ、こわすぎる……。『雷鬼(いかずちのおに)』か。ほんとに鬼だな～。

そこで額に衝撃。

無心に成って無いと気付かれたらしく、コンッと木刀の剣先で軽く額を小突かれた。

だ、だめだ、だめだ。集中するんだ。……心で世界を感じるんだ。集中。集中。集中。……。……。

「（やれば出来るんじゃよなこの子は。まぁ儂(わし)ら夫婦で鍛えてきたんじゃから当然と言ったら当然じゃが、やはり天性の才能じゃろうな。……そして血、か。）」

瞑想に入ったリクを見ながらノリムネは思う。

リク。この子は捨て子だった。

少し長めで真っ黒な髪は癖っ毛で、優しげな雰囲気が漂う。

垂れ目で、その瞳の色も真っ黒だ。

しかしその色はいつも黒では無い。

８年前。

耀鉱山ノーヴェで赤ん坊のリクを拾った時。

泣き叫ぶその子の瞳は、血の様な紅（あか）だった。

第5話

【（8年前）　カーナ村　外れの森　ノリムネとクラサの家】

「……雨か。」

ベッドでクッションに身を預けながら休んでいたクラサは窓の外に広がる曇天からパラパラと落ち始めた雨粒に気が付いた。

明るく美しい栗色の長い髪は病気の悪化と共に色は薄くなってきた。

しかし雪の様に白く透き通る肌、ぱっちりとした黒い瞳は相変わらずで美しさを保っている。

「（洗濯物取り込まなきゃいけないわね。）」

パタンと読んでいた魔術書を閉じてそのまま枕元に放り投げ、そのまま立ちあがった。

が、フッと目の前が暗くなり、膝をついてしまう。その際、触れてしまった花瓶が床に落ちてしまい音を立てて割れてしまった。

「（あらま。お気に入りだったのに。）」

ドタドタドタッ！

音を聞きつけたノリムネは血相を変えて部屋に飛び込んで来た。

「クラサ！大丈夫か！？クラサっ！」

「大丈夫よ、ノーちゃん。ちょっとクラっときただけよ。それよ」

「しかし花瓶がっ！怪我は？！怪我とか！？怪我とかっ！？」

「だから大丈夫よ。それよりあ」

「いや待て俺が確認する！ちょっと見せてみろ！」

「いやだから、雨が」

「クラサ！クラサっ！！」

クラサは少し呆れながら手の平で軽くノリムネの頬へ触れた。

パキパキッ！

空気中の水分が氷結し、ノリムネの頬を凍らせる。

「つつつ冷たい！ク、クラサ何するんだ！？」

「人の話を聞きなさい。雨よ。」

窓の外をビシッと指差しながらノリムネを諭す。

長年連れ添ったこの美しい彼女は口数が少なく、ぶっきら棒だ。

だがずっと一緒に居たノリムネはクラサが何を考え、何を思い、そして想うのかが表情や雰囲気を見るだけで解る様になった。なぜかこれを彼女に指摘すると怒るのだが。

「洗濯物か？いやそんな事より今はクラサの」

「しっかり凍らせないと解らないの？」

ノリムネはビシッと直立する。行ってきます！と言ってそそくさと外へ出て行った。

クラサはそんな彼の後姿を見送る。

彼女は彼の事を呆れながらも嬉しく、愛おしく、感謝をしていた。

「（戦いの時は冷静沈着で部下の信頼も厚くて、場合によっては冷徹冷酷とも言える判断も辞さなかった雷鬼（いかずちのおに）はなんで私の事になると駄目な人になっちゃうのかしらね？……やっぱり愛されてるって事かしら。うふふっ。）」

頬を凍らされたにも係わらず、洗濯物を取り込みながら滲み出る

冷や汗。
「ま、また怒られてしまった。そりゃ氷雪姫なんて呼ばれる訳だわ。恐すぎる。……まぁ俺は他人が知らない彼女の可愛い所を知っているがな。ふっ。」

５０歳を過ぎても仲睦まじい夫婦だった。

――――１年前の世界大戦。それは人と人との戦いでなく、人と魔物との終わりの見えない戦いだった。
空間が歪み、其処から出現する魔物達は大変な脅威だった。
魔物達の中には邪竜と呼ばれる街を一瞬で消し飛ばせれる様な力を有したモノも数体確認され、本当に地図から消えた街や国も少なくなかった。
各地域、各国が自国の戦力で協力対抗したが、無尽蔵で無秩序に湧く魔物に人々はジリ貧を強いられた。
しかし開戦宣言から半年が過ぎた辺りから、魔物の発生が減少し、終には歪み現象は無くなった。

終わりを迎えた其の世界大戦は不安を残す結果となった。

開戦時には既に退役して第二の人生を歩もうとしていたノリムネとクラサ夫婦だったが、己達の身を守る為にと参戦を決意し多大な戦果を挙げた。
それは結果としてクラサの病を悪化させ、寿命を削る結果となってしまったのは言うまでも無い。

今日の夕飯はクラサのシチューだった。
「うん！美味い！俺の嫁はやはり天才だな。」

「うふふ、ありがとう。」

昼に降り始めた雨は今や本降りへと変わっていた。
屋根に強く打ちつける雨の音は絶える事が無い。

夕食後のお茶をしていた二人は何かの違和感を感じていた。
「ノーちゃん。」
「……クラサが察したのなら間違いないか。」
窓の外へ鋭い眼光を向ける。
「ええ、強い魔力、そして波動を感じるわ。」
「何処(どこ)からだ？敵か？」
ノリムネは既に愛刀を身に寄せていた。

今の時代、強い魔力を発する魔術士は少ない。
それは魔耀石の活用も原因にあるが、魔法を教授できる環境が無く、さらに魔法はセンスと魔力量に左右される為、良い魔術士が育ちにくいのだ。

なので強い魔力を発するとなると、自分達の命を狙う者か魔物のどちらかである。
しかし、クラサは首を振る。
「敵意は無いわ。……こっちを視ている？……ついて来いという事？」

クラサの最高レベルに近いと言われる魔術士としての感覚が研ぎ澄まされ、見えない誰かの真意を汲み取る。

「俺が行こう。」
立ちあがると外へ出る為の扉に向かう。
「あたしも行くわ。」

ノリムネはクラサの瞳を見る。
意思の強さを感じさせるこの瞳の時は、何を言っても無駄だと理解している。
コクリと頷くと、二人は雨天用の外套（がいとう）を着てから外へと出た。

第6話

【（8年前）　カーナ村　外れの森】

雨が降り続く中、ノリムネとクラサは見えない誰かに誘(いざな)われて森の中を歩いていた。
クラサが翳(かざ)す杖の先が光源となって光を生み出し、暗く湿った森を明るく照らす。

「……妙だな。」
見えない誰かは確かに存在する。強大な魔力、迸(ほとばし)る波動。
しかし何かが変だった。その何かが解らないのだが。
「ええ、妙ね。見えないけど居る。でも居ない。」
クラサは足元を照らしながら眼前に広がる暗闇に目を向ける。
敵意は無い。だったら姿を見せても良いと思うけれど。

二人は首を傾げながら森を進んで行く。

「このまま進むとノーヴェか。夜行性の魔物達に遭わなければ良いが。」

耀鉱山ノーヴェ。いや、その他の耀鉱山にも言えるのだが、耀鉱山周辺には強力な魔物が住み着く場合が多い。
さらに耀鉱山と呼ばれる一帯の地域は容易に採掘が出来なく、ポツポツとある自然の洞窟を採掘拡張しながら耀石を掘るしかない。
当然その洞窟には魔物が住み着く。
耀鉱山の地表が硬過ぎる為だ。
質の悪い耀石は其処(そこ)ら辺に石ころと同じように転がっているし、大きいものは土に埋まっている。

耀鉱山には多くの耀石が地から顔を出し、色鮮やかに山を守っている。
宝が埋まる危険で美しい要塞。それが耀鉱山である。

【（8年前）　耀鉱山ノーヴェ　未開拓洞窟】

森を抜けると拓(ひら)けた場所に出た。
ノーヴェの一角に着いてしまったのか未(いま)だに人の手が加えられていない洞窟が口を開けている。

いつの間にか雨は止み、虫が鳴く声が聞こえ始めていた。

雲の隙間から覗き出した2つの月が辺りを照らす。

ノリムネとクラサは洞窟の前に佇む人影に意識を向けた。
自分達から20m程離れているだろうか。
真っ黒な外套(がいとう)を着込んだその顔はフードに隠れて見えない。
その人物の足元には布を巻いた様なモノが落ちている。

「女か。」
ノリムネはその人物の体格や雰囲気から女性である事を見破った。

「……ノーちゃん、浮気？」
クラサは正面を向いたまま目を細めて呟いた。
「え！？ど、どどどうしてそうなる？！」
「浮気したら氷漬けにして埋めてから離婚して半殺しにするからね。」
「いやそれは氷漬けにされた時点で半分死んでるから！」

この夫婦はこんな状況でもいつもの姿勢を崩さない。それは冷静だとも言える。

ズオォッ！！

急に謎の人物から強力なプレッシャーが放たれる。

夫婦漫才をしながらもその人物から目を逸らしていなかった二人は正面からそのプレッシャーを受ける。

常人なら気を失うレベルの波動を二人は平然とした顔でやり過ごした。

プレッシャーに殺気は無かった。

「すまんな。俺達に用が有るのだな。」

「あらま。ごめんなさいね。それで、あたし達を呼んだのは何故？……ん？あら？」

そこでクラサは気が付いた。

謎の女性の足元で布に包まれているその命に。

耳を澄ますと泣き声が聞こえる。

「……赤ちゃんか？」

実は完全に臨戦態勢だったノリムネは少し気を緩めた。

謎の女性は屈んで赤子の頬を撫でた。

愛しむ様に撫でたその手はクラサにも負けない真っ白い手だった。

スッと立ちあがった女性はノリムネとクラサを見つめると軽く一礼した。

すると、いきなり女性の姿が霞み始めた。

ノリムネとクラサが何かを言う前に、その姿は消え失せてしまった。

謎の女性の気配は完全に消えている。

赤子の泣き声だけがこの空間を支配していた。

呆然とその様子を観察していた二人は我に返った。

「かなりの手錬（てだれ）だな。魔法陣を展開せずに転移したのか？いや、それとも幻影だったのか？」

ノリムネは顎に手を当て考えに浸る。

「それだとあの魔力や波動が説明つかないわ。どっか行っちゃったのならそれまでよ。」

クラサは考え込む夫を置いて赤子に向かって歩き出した。

「それもそうか。……しかし赤ちゃんを置いていったという事は、そういう事なんだろうな。」

妻の後を追いながらノリムネは呟く。

クラサはニィっと満面の笑みで夫を見た。

「そういう事よ。きっと。」

「おぎゃぁ！おぎゃぁ！」

「あらあら、泣かない泣かない。まだ出産して間もないわね。よいしょっと。」

赤子を抱き上げあやすクラサ。

「男の子か。よしよし。泣かない泣かない。男の子でしょう。」

少しだけ生えている黒い髪の毛の頭を撫でてあげる。

そんな姿をノリムネは複雑な心境で見つめていた。

「（クラサ……。）」

若い頃から子作りに励んでいたが、ノリムネとクラサは子宝に恵まれなかった。

年を取るに連れて子を産むには拙(つたな)くなる身体、そして病も重なり、子を授かる事が難しくなってしまった。（当然そういう行為は続けているが。）

二人は子供が好きだった事もあり、孤児を引き取ろうかと話し合った事もあったが急な戦争が勃発し、結局は引き取る機会も無く今に至っていた。

「（謎の女性の事は気になるが、これは良い機会だったのかもしれないな。もしも神が存在するのなら今日だけは感謝しよう。）」

ノリムネは天を仰いだ。

数え切れない星たちが輝く川を創り、２つの月は神秘的な光を放ちながら決して離れずに周り踊る。

「ノーちゃん！」

「ああ、解ってる。早くその子を連れて家へ帰ろう。クラサもその子も身体を冷やすといけないしね。」

ノリムネはクラサの傍に立ち、肩を抱いた。

「うん。それは勿論なんだけど……この子……。」

自分の妻が要領を得ない言い回しするのは珍しいなと思い、赤子の様子を見た。

いつの間にか泣き止んだその子はぼやーっと目を開けてクラサの顔を見ている様だ。

……その瞳は血の様な紅(あか)だった。

自分でも息を飲むが判った。
目だけじゃない。この子から確かに魔力を感じる。しかもはっきりとした魔力を。
「……男の子と言っていたが女の子の間違いじゃないのか？」
「いいえ。ほら、おちんちん付いてるでしょ？」
「お、おち……いやまぁ、うん、本当に付いているな。」

しかし状況の整理がつかなかった。
クラサも眉を顰(ひそ)め、思考を廻(めぐ)らしている。

「この血の様な紅い目、赤ちゃんにしてこの魔力。特徴から言うと間違いは無いと思うが、男の子か。」
「聞いた事が無いわ。それに発症は大体5歳を過ぎた辺りと言われているわ。生まれたばかりで既になんて。」
「……人族では無いのかもしれないな。」
「だとしたら、そうでないのかもしれないわ。」

う～ん、と二人で考え込む。

「うぇっ、うぇっ」
場の雰囲気を察したのか赤子がまたも愚図(ぐず)り出してしまった。
「あらまあ、よしよーし。」
クラサは身体を揺らしながらあやす。
その姿は母そのものだった。

「ノーちゃん。」
赤子が寝始めたのを確認して、クラサはノリムネの顔を見た。それはとても優しい笑顔だった。
「そうだな。まぁ育ててみれば判るだろう。……それにこんなに可

愛らしい子をこのまま放置するなんて出来ないしな。」
我が子を見る様な優しい表情でノリムネも答える。
「子、じゃなくてリクよ。」
「……いつ決まったんだ？」
ノリムネは表情そのままで固まった。
「いま。」
「……とりあえず家に帰ろう。そこで名前は相談だ。昔に考えた名前のリストを引っ張り出そう。」
「だめよ。リクって決まったの。ね？リクぅ～？」
クラサは自分の頬を寝ているリクに擦り付ける。

ノリムネは諦めた様に苦笑いを浮かべ、愛する妻クラサと愛する息子リクと一緒に帰路に着いた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【カーナ村　外れの森　ノリムネの家】

「（あれから8年か。時が経つのは早いな。……儂（わし）達の息子はいつも元気じゃよ。クラサ。）」
リクとの出会いを思い出しながら老いたノリムネは妻を想い感傷に浸る。
「（自分に自信が無くて、面倒臭がりで、繊細かと思ったらガサツで、でも優しくて、言われた事を守れて、情に厚くて、少しエッチで、そして冷静で。儂とクラサの性格を見事に受け継いだな。本当に血が繋がってるんじゃないかと思うわい。）」
「ん？」
そこでノリムネはリクのいつもと違う雰囲気を感じ取った。

「……どうかしたかリク？」
リクは座ったまま目を開け、ノーヴェの山々がある方の森を見つめていた。
表情は瞑想している時の様に無だった。
ただ、その瞳は黒から紅に変色している。
魔法を使っている様では無いから何か興奮しているのか？
……いや違う。……これは。

ノリムネは椅子から立ち上がり、近くにあった愛刀を引き寄せた。
「（儂が気付かなかったのに、この子は気付いたのか。ふふ、さすが我が子だ。）」

リクも立ち上がり、先ほど自分が小突かれた木刀を手に取る。
「じいちゃん、狩りに行く手間がはぶけたね。」
「そうじゃな。まぁ喰えるヤツなら良いが……それとじいちゃんで無くて父さんな。」
「……わかったよ、じいちゃん。」
「クラサは母さんと呼ぶ癖になんで儂はじいちゃんなんだろうか……。」

家の周りは開いており、周辺は森に囲まれている為、害敵が近寄ると直ぐに判る様になっている。
木々の間から何かが蠢き近づいてくる。
「クラサの魔除けの結界を撥ね退ける魔物は多く無い。油断するなよ。」
ノリムネは既に戦闘へとギアを切り替え、森を睨む。

「わかった。」

紅い瞳のまま、リクは木刀を正面で構える。

……

何かが姿を現した瞬間、戦いが始まった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8819x/

剣と、魔法と、そして明日と

2011年11月21日20時04分発行